

田中俊雄の染織関係資料について

與那嶺 一子 篠原 あかね

Report on Okinawan textile research materials by Toshio TANAKA

Ichiko YONAMINE, Akane SHINOHARA

沖縄県立博物館・美術館, 博物館紀要 第18号別刷

2025年3月14日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.18

March, 2025

田中俊雄の染織関係資料について

與那嶺 一子¹⁾ 篠原 あかね²⁾

Report on Okinawan textile research materials by Toshio TANAKA

Ichiko YONAMINE¹⁾, Akane SHINOHARA²⁾

1 はじめに

1976年、田中俊雄（以下、田中）と妻の田中玲子（以下、玲子）の共著で沖縄の織物を総合的にまとめた研究書『沖縄織物の研究』（1976年 紫紅社）が発刊された。執筆した田中は1939年と1940年に民藝協会の一員として来沖し、沖縄の織物について調査した人物である。この書籍は、田中の生前に明治書房より出版された『沖縄織物裂地の研究』（1952年）と、玲子がまとめた田中の遺稿「沖縄織物の研究」で構成されたもので、1953年に亡くなった田中の没後に出版された。田中が目にした沖縄の様子を考察とともに記されており、今なお沖縄染織を研究する者や製作に関わる者にとって重要な手引きとなっている。また、文章の端々に田中の沖縄への想いが溢れており、ストイックに研究に打ち込んだ姿が読み取れる。このように重要な研究を残した田中だが、1953年に38歳という若さで亡くなったこともあり、その生涯と研究の紹介は少ない。

沖縄県立博物館・美術館には、田中に関連した資料が2件ある。1件は1952年6月、田中から寄贈された「沖縄織物裂地集」で、もう1件は2004年3月、田中の遺族から寄贈された生前に調査した沖縄染織及び日本の工芸の研究メモや原稿等、2,320件の田中俊雄の研究資料である。

「沖縄織物裂地集」は自らの研究のため戦前に収集した裂が貼られた冊子で、沖縄戦で多くの染織品を失った沖縄へ贈るものであると田中と玲子両名の署名入りの前書きがある。また、2004年に寄贈さ

れた資料には「跋」と記された、1944年～1945年にまとめていたと思われる『沖縄織物研究』の草稿が2件ある。本稿では、これらの資料を紹介することで、田中が3度の来沖で見知った沖縄への想いを考察できるのではないかと考え、田中俊雄研究の一步とすることにした。



写真1 田中俊雄

〈本資料の時代背景及び希少性・重要性について〉

裂地集の裂や前書きの考察のため、下記の資料(全て沖縄県立博物館・美術館蔵)を調査分析した。

① 1952年6月寄贈「沖縄織物裂地集」

¹⁾ 琉球大学 〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原1

University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa 903-0213, Japan

²⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

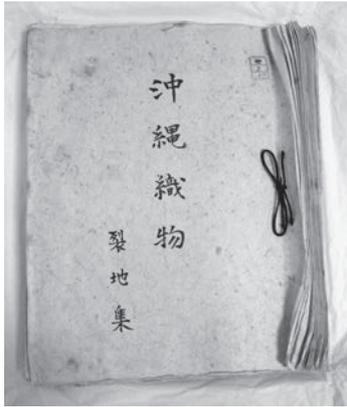


写真2 「沖縄織物裂地集」

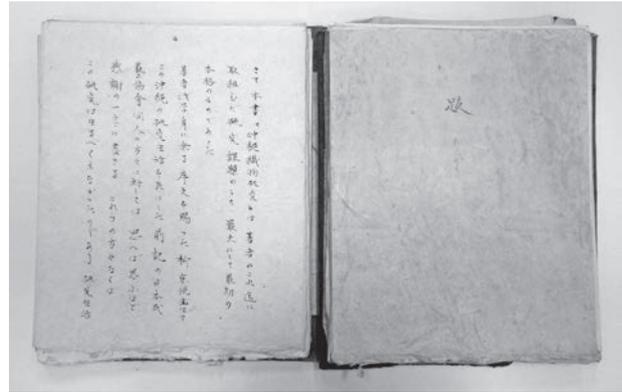


写真5 「沖縄織物研究の跋」：箱13-7

- ② 1952年7月発刊 田中俊雄・玲子著『沖縄織物裂地の研究』の跋部分

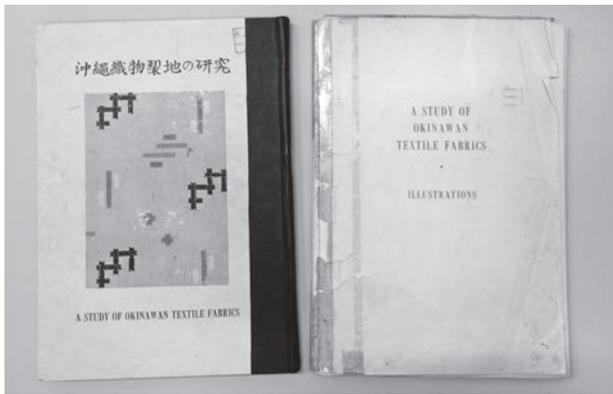


写真3 『沖縄織物裂地の研究』

- ③ 2004年3月 田中の遺族より寄贈された2,320件の田中俊雄の研究資料。1944年～1945年にまとめたと思われる「跋」（箱23-207）、「沖縄織物研究の跋」（箱13-7）の2件

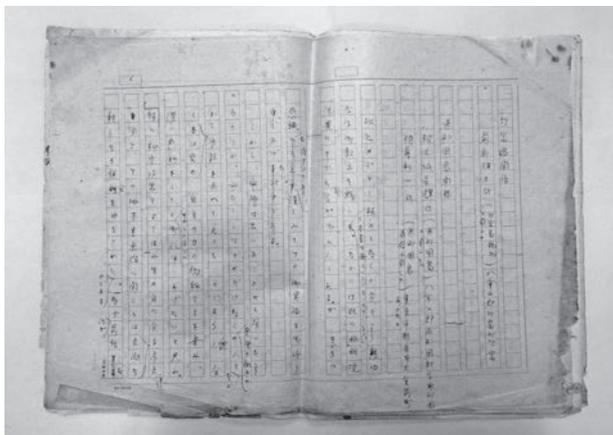


写真4 「跋」：箱23-207

『沖縄織物裂地の研究』（以下『裂地の研究』）は、田中が戦時中に執筆していた『沖縄織物研究』の一部をまとめ、戦後発刊したものであり、また「沖縄織物裂地集」（以下、裂地集）を沖縄に送る翌月に出版されていることから、裂地集を準備した時点では、『裂地の研究』は入稿されたものと推測され、資料①、資料③を分析する参照資料となると考えた。

〈裂の調査〉

裂地集には収集した裂の概要や収集元が記されておらず、貼付された78枚の裂を実測し、マイクロスコープによる拡大撮影をすることで繊維や染料を想定し、裂の概要をまとめた。収集元などは資料②の跋や資料③を参照することで推測した。この調査結果は、これまで不明であった裂地集と貼付された裂をより広く活用できるものとするを旨とした。

〈前書き、跋文の考察〉

2004年に寄贈された跋文2件は、戦時中に執筆されたと思われる、今回初めて紹介される。この2件と、『裂地の研究』の跋、裂地集の前書きの内容を比較することで、田中の想いの推移をみている。

〈田中俊雄について〉

田中は1914年11月7日、山形県米沢市の機屋「田駒」の長男として生まれる。尋常小学校卒業後、山形県立米沢興譲館中学校（現、米沢興譲館高校）に入学するが、病のため休学、復学を繰り返す。その頃、大熊信行（1893年～1977年／米沢出身の経済

学者で文芸評論家、歌人)に出会い、大熊が主宰する「まるめら」の同人となり、歌や評論を発表している。

1935年、上京し、大熊の紹介により柳宗悦に出会い、民藝運動に参加していく。柳の勧めにより1939年の沖縄調査に加わることになる。所謂、民藝の第二次調査、田中としては第一回目の調査である。3月から9月まで滞在し、沖縄島、久米島、宮古・八重山の島々、さらに台湾まで足を伸ばし染織調査を行っている。翌年、1月に2回目の来沖があり、さらに3月から8月まで映画撮影に立ち合う目的で3回目の来沖を果たしている。

田中が来沖した目的は、1939年7月刊行『月刊民藝』の「民藝運動と琉球行」に述べられているが、簡単に紹介しておく。田中は民藝運動が現在の産業態と積極的結びついていない状況を民藝の課題として捉えていた。この沖縄への民藝第二次調査に工芸作家が加わり、沖縄という産業態に関わることで、民藝が美術運動から脱する契機となると期待していた。結果、現在(1939年当時)の産業への途をおぼろげながら把握することができたが、工芸作家達の動きは田中の考えとは異なり、期待通りではなかった事が述べられている。しかし、沖縄各地で調査した「琉球の織物」は彼の心を捉えたのであろう。調査のため滞在時間を延ばしたことが田中の文章から読み取れる。

1943年、日本大学芸術科(現、日本大学芸術学部)で教鞭とり、「日本工作文化史」を担当する。

1944年、和田玲子(以下、玲子)と結婚。以後、玲子は共同研究者として田中の執筆を支え続けた。

1944年～1945年に執筆していた『沖縄織物研究』は刊行を目指していたが、出版直前に原稿が消失し陽の目を見ることはなかった。

それから7年後の1952年7月、『沖縄織物裂地の研究』として、沖縄での調査研究の成果を出版し、その後、『沖縄織物文化の研究』、『御繪圖帳の研究』を刊行する計画であったが、翌年1953年1月事故により亡くなる。田中の遺志は玲子によって受け継がれて、1976年、『沖縄織物の研究』(田中俊雄・田中玲子著/紫紅社)が出版されている。

田中の年譜や功績、人となりについては、特別企画展「沖縄織物へのメッセージ～田中俊雄の研究～」

(2003年 沖縄県立博物館)、『民藝 六月号 第八一〇号 特集 田中俊雄と沖縄の織物』(2020年 日本民藝協会)に詳しく、それらを参照されたい。

2 沖縄織物裂地集の前書き及び田中俊雄の研究資料より「跋」2件の概要

(1) 資料受け入れの経緯

〈1952年受入の沖縄織物裂地集〉

裂地集は1952年6月に編集され、同月に寄贈されている。田中は戦後來沖していないため、どのように寄贈されたのかその経緯は分かっていない。

一つの可能性として、柳悦孝(以下、悦孝。民藝協会同人として田中と来沖/1911年～2003年)は、1947年来沖しており、田中は悦孝から沖縄の戦後の状況を聞いていたと思われる。それを知り、裂地集を作成することで、何等かの助けになればと考えていたのではないか。裂地集の裏表紙の内側に「琉球大学 博物館御中」とある事から、悦孝が1952年に琉球大学で講演しており(悦孝、戦後5回目の来沖)、その際に裂地集を託したのではないかと考えたが、柳の来沖は11月であるため、受入月にズレがある。また、戦前に田中と親交のあった原田貞吉が沖縄民政府立博物館の館長をしており、直接送った可能性も考えられる。

〈2004年受入の田中俊雄の研究資料〉

田中没後、田中の原稿、調査メモ、作品裂、紙焼き写真などは田中の実家の二階に保管されていた。



写真6 田中家外観(2002年)



写真7 田中家二階の様子(1997年)

研究のため来客する者が閲覧しやすいように、膨大な資料は分類され木箱に入っていた。玲子や民藝協会員とご弟妹らにより整理されたものと思われる。

その情報を聞いていた與那嶺が仙台市博物館で開かれる展覧会の展示作業の帰りに訪問したのが、1997年10月29日である。その際、田中家当主で俊雄の弟、四代目駒蔵は「この家から資料を移動しての調査はできないが、ここに来るのであればいつでも受け入れる。」と話していた。資料がかなり多く、一人での調査は困難だと考え、4年半後の2001年5月、沖縄県立芸術大学卒業生の幸喜新、山田葉子に小野まさ子(沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室/2002年から参加)の3名と共に、私費で調査を始めた(後に、展覧会開催に合わせ「田中俊雄研究会」を結成)。2002年7月に田中家より資料寄贈の申し出があり、翌年7月に米沢から沖縄県立博物館へ移送され、資料の概要と数量の確認作業が田中俊雄研究会と美術工芸担当の赤嶺敏により行われ、寄贈を記念した特別企画展「沖縄織物へのメッセージ-田中俊雄の研究-」が10月28日～12月7日の会期で開催された。

資料の受入れまでの経緯は、下記の通りである。
 平成9(1997)年10月 第1回調査(與那嶺)
 平成13(2001)年5月 第2回調査(與那嶺・山田・幸喜)
 平成13(2001)年9月 第3回調査(與那嶺・山田・幸喜)
 平成14(2002)年7月 第4回調査(與那嶺・山田・小野) ※寄贈の申し出

平成14(2002)年10月 第5回調査(與那嶺・山田・幸喜)

平成15(2003)年7月7日 資料の寄贈を受け輸送(與那嶺・赤嶺)

平成15(2003)年10月～12月特別企画展開催

寄贈資料の内訳(総計2,320件)は下記に示した。

No.	分類	件数
1	原稿など	1,032
2	写真(紙焼き)	153
3	図・表	100
4	雑誌・新聞切り抜き	74
5	抜き書き(写本など)	551
6	書籍(文献)など	97
7	調査メモなど	95
8	分析用カードなど	43
9	裂	30
10	その他(着物・織道具etc.)	145
計		2,320

(2) 資料の概要

〈沖縄織物裂地集〉写真2

裂地集は、「沖縄織物/裂地集」と墨書された表紙から始まり、2～3頁目に田中の想いが綴られている。本裂地集は、研究資料の一部を沖縄へ返還するためにまとめたものであり、全てが焼失したと聞く沖縄で再び美しい織物が再興されることを祈るという内容で、以下のように結ばれている。「喜ビニ満チテ 本輯ヲ沖縄ノ皆様ニ/オ贈リイタシマス/一九五二年六月/東京板橋ニテ/田中俊雄/田中玲子(田中丸印)」

表紙と裏表紙を除き53頁で、そのうち43頁に78枚の裂が貼付されている。1頁に1枚から3枚の裂が貼られているが、裂が欠落した糊の跡が2箇所確認できるため、元々は80枚の裂があったものと思われる。裂は「縞」「緋」「紋織」の3種類に分類されている。紙面の都合により全てを紹介することができないため、以下で項目ごとに素材の内訳と特徴を記す。

「縞」に分類された裂は17枚あり、その内訳は木綿8枚、芭蕉3枚、絹3枚、紡績糸と木綿もしくは苧麻の交織3枚である。全て平織で、経縞が9枚、格子縞が8枚である。

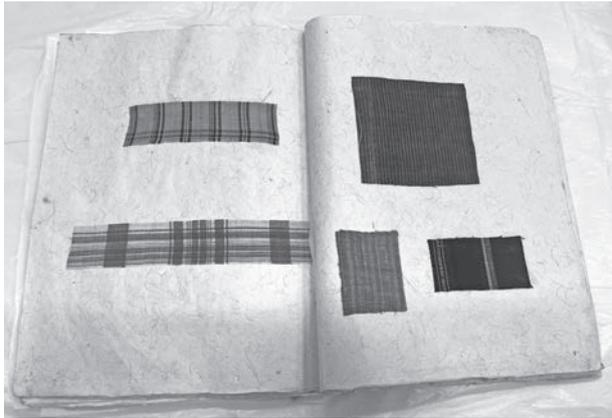


写真8 「縞」

「縞」に分類された裂は58枚あり、その内訳は木綿43枚、絹6枚、芭蕉5枚、苧麻（ラミー含む）4枚である。芭蕉は生成地に茶か紺（藍）の縞で、木綿は大半が紺地経緯縞で、薄茶地1枚や白黒地のやしらみ織1枚が含まれる。

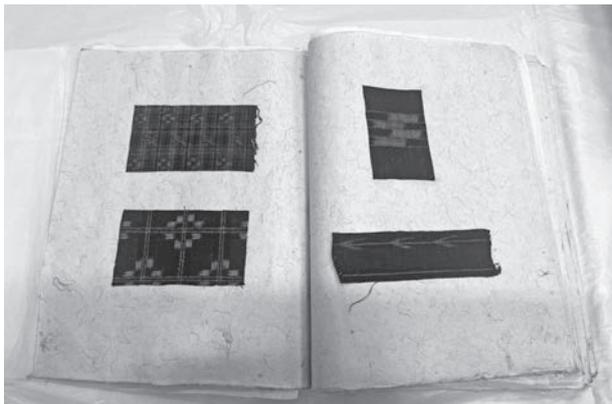


写真9 「縞」

「紋織」に分類された裂は木綿3枚で、白地両面浮花織、紺地経浮花織、白地縫取織である。

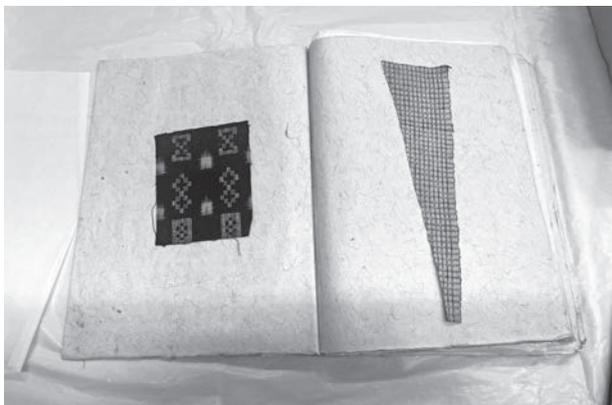


写真10 「紋織」

以上の裂は、形や大きさに統一感がなく様々であるものの、大まかに素材や地色ごとに並べられている。一部、顔料や化学染料で染められたことが推測される裂も含まれている。産地や収集地に関する情報は無いものの、資料③の沖縄各地で調査をした記録と照らし合わせることで、特徴的な裂は産地の推測が可能だと考えられる。また、『沖縄織物の研究』の「跋」の中で関係者への感謝を述べる文中に、「我が身にまとっている着物まで割いて、その裂地をわけてくださった、沖縄の名さえも明かされない無数の方々、」との記述があることから、実際に当時着用している人から分けてもらったこともあったとわかる。

伝世する染織資料は、製作年代が明らかな基準作が非常に少ない中で、本資料は田中が沖縄で収集したことが明らかであるため、琉球王国時代から近代（1939年～1940年）までの沖縄織物の様子を伝える貴重な資料であるといえる。

〈田中俊雄の研究資料より「跋」2件〉

資料は田中家の二階にあった際、既に整理されていたので、沖縄へ輸送する際はその状態を崩さないように梱包し箱番号は47になった。博物館の収納箱には、その箱番号が振られている。中には封筒があり、それぞれに箱番号と一連番号が振られている。「跋」2件はそれぞれ箱13と箱23にあり、調査時の仮の表題が付けられている。

「跋」(本をまとめるにあたっての関係者、協力者)(箱23-207)

概要：400字詰め原稿用紙12枚（1枚は「跋」と書かれた表紙と残り11枚は原稿）

内容：原稿の左上に番号が振られており、表紙から始まる。続く3枚は文字がぼやけて判読できないが、次の原稿には「6」とあり、1枚欠落していることがわかる。また原稿9の文章が途切れており、10枚目があったと思われる。続く4枚は原稿用紙が異なり、また関係者、協力者の名前も重複している。記されている名前は沖縄の工芸関係者が訪れた島ごとに整理されており、地元の学校関係者や名士等とともに調査に協力した那覇の婦人達の名

もみられる。那覇での協力者には、後に沖縄民政府立博物館長となる原田貞吉や山里永吉の名があり、親交があった事がうかがえる。出版にあたっての関係者の名も全てまとめられている。

「沖縄織物研究の跋」(箱13-7)

概要：製本用の表紙、裏表紙となる厚紙1枚。和紙二つ折りの用紙が続く。白無地、青や桃色に染めたものがある。

内容：「沖縄織物研究第四巻 自家保存版 自装 昭和廿年四月 著者(田中丸印)」があり、手書きの自装本を作成しようとしていたことがわかる。索引目次はあるものの、内容は書かれていない。頁をめくった途中にも「田中俊雄著 沖縄織物研究第四巻 沖縄織物の工藝文化的考察 明治書房より」とあり、何度か書き直していた様子もうかがえる。そこから数枚進んだところに「跋」とあり文字下に鉛筆で「あとがき」と記されている。田中の自筆原稿であり、22頁に及ぶ。和紙二つ折りを2枚おいて「昭和二十年三月二十八日 空爆下の皇都 板橋の寓居にて 著者」と書かれている。

この跋にも、研究、出版に至る過程を援助した方々、出版、印刷の関係者、沖縄での調査研究を支えた方々への御礼が長々と記されている。

また、この執筆中に沖縄が壮絶な最前線となっている事を聞き、戦前に見聞きしたことを「かけがえのない宝を預かっている」と述べている。

3 まとめ

本稿では、沖縄県立博物館・美術館が所蔵する田中俊雄の染織関係資料を紹介した。『沖縄織物の研究』は、沖縄の染織研究をするうえで欠かせない基礎研究書として活用されているものの、その元となった裂地集や2,320件の研究資料はこれまでに活用される機会が限られていたため、本稿が今後の活用の一助になれば幸いである。

本稿で紹介した「跋」や裂地集の前書きの内容に

表れる田中の沖縄への想いは並々ならぬものがあるが、その想いは、戦時中に沖縄の惨状を知ったうえでより強くなったことがうかがえる。「跋」(箱23-207)には、その気持ちが書かれていないが、「跋」(箱13-7)にはそれが記されており、戦禍で甚大な被害を受けた沖縄を憂い、自身が戦前の沖縄で見聞きした内容をまとめ、研究書を完成させることが責務だと述べている。本稿では紙面の都合上、その全文を載せることが叶わなかったため今後の課題とし、田中俊雄研究を通じて、沖縄染織の研究をより深めることに繋げていきたい。

参考文献

田中俊雄・田中玲子『沖縄織物の研究』1976年 紫紅社

特別企画展「沖縄織物へのメッセージ～田中俊雄の研究～」2003年 沖縄県立博物館

『民藝 六月号 第八一〇号 特集 田中俊雄と沖縄の織物』2020年 日本民藝協会

『沖縄県立博物館50年史』1996年 沖縄県立博物館

『柳 悦孝のしごと一民藝運動と女子美術工芸草創期一』2007年 女子美術大学美術館

『世界に誇る伝統工芸の粋 そめおりの美 顕彰四人展』1986年 沖縄タイムス社・琉球放送